

○北海道植物新産地報告 (1) (伊藤浩司) Koji ITO: New localities of Hokkaido plants (1)*

1) ミヤウチソウ (新称) *Cardamine trifida* B.M. Jones (*C. tenuifolia* Turcz., non Hook. 1834) 本種は高さ 20 cm—40 cm のやや繊細〜粗剛な植物で、最も特徴的なのは、糸状の根の先端に腎円形、多肉質根塊をもつことである。花は桃紅色で茎葉は羽状に 3—5 裂し、裂片は線形〜広線形、全辺から欠刻状のものまでである。本種はユーラシア大陸に広く分布し、極東では、満州、朝鮮から樺太、千島に分布する。北海道では 1911 年、北見国南宗谷から採集された標本と 1934 年 5 月、利尻島メヌウシユロで採集された標本が SAPA にある。この頃、樺太では既に知られていて、宮部・三宅両氏の“樺太植物誌”(1915)でホソバコンロンソウの和名が与えられていた。

今回、宗谷地方のオホーツク海側、頓別川上流で岩石の露出が多く、その上をハイマツやミヤマハイビャクシンなどの繁茂する植物群落中に本種が採集された。

ホソバコンロンソウの名はその当時の種小名に由来していると思われるが、植物全体の容姿からみて“コンロンソウ”の“細葉型”のイメージからははなれている感じがする。新しい産地の発見者であり、宗谷地方の植物に詳しい宮内敏哉氏の名を記念して、敢て“宮内草(ミヤウチソウ)”の名を提唱したい。

本種は、ハナタネツケバナ(*Cardamine pratensis* L.)と同じように、筆者のいう“北海道オホーツク型”分布を示す植物の一つであろう。

2) ヒダカソウ *Callianthemum miyabeianum* Tatewaki ヒダカソウの分布は日高アポイ岳とそれに隣接する蛇紋岩地域のみ知られていた。最近、北海学園大学佐藤謙氏は夕張山系の非蛇紋岩地帯の一峰で、ヒダカソウ属の一植物を採集し、筆者に意見を求めてきた。同氏によると一見ヒダカソウに似ながら、現行の植物誌や図鑑類の記述と照らし合わせると、キタダケソウやカラフトミヤマイチゲとの類似点も少なくないという。筆者は、この属の植物の変異についてあまりよくわからないので、東大の原先生にお願いしたところ、“ヒダカソウ”と同定される旨のお知らせを頂いた。蛇紋岩植物として知られていた植物が非蛇紋岩、中でも石灰岩地質に出現する例はしばしば知られており、たとえば石灰岩の蛭山(ぎりぎしやま)のミヤマハンモドキにその先例がある。

3) フサスギナ *Equisetum silvaticum* L. 北海道でのフサスギナはニセコ山系神仙沼に旧くから知られ、ついで北見国置戸町旭から 1952 年川代善一氏が採集され、現在この二つが知られている。さらに、第三の産地があり、それは大雪山系、黄金ヶ原である。今から 10 年ほど前、IBP の大雪山系の調査時、当時北大農学部の大大学院学生であった佐藤謙氏(現北海学園大学生物学教室助教授)が採集されたものである。

(北海道大学 大学院環境科学研究科)

* Contribution from SAPT (Fac. Agr. Hokkaido Univ.)